

日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働運動

The Labour Year Book of Japan special ed.

第六編 朝鮮民族独立運動

第三章 祖国光復会の結成——十大綱領

第二節 新しい根拠地の創設と闘争の展開

「祖国光復会」結成以後、朝鮮人民革命軍部隊は、朝鮮の国境に近く、けわしい山岳地帯で敵の支配力が弱く、朝鮮の貧農や火田民が多い、長白一帯に新しい根拠地を創設した。長白根拠地は東「満」の解放地区とは異なり、秘密形態をとり、敵の攻撃や状況のいかんにより流動性のあるものであった。

この根拠地の密営を拠点に、人民革命軍部隊は小・大規模の戦闘をおこない、敵の後方を攪乱させ、敵兵を恐怖と不安におとしこんで戦闘士気を減退させる反面、人民革命軍の士気はもえ上がり勝利への自信をかため、各地の戦闘で多くの戦果をおさめた。そのおもな戦闘は、一九三六年八月の長白山脈一帯における敵の「討伐」中心地撫松県城の攻撃であり、一八〇〇余名の兵力をもって敵三〇〇余名を殺傷または捕虜にし、多くの軍需品を鹵獲した。一九三六年の冬には「満州軍」と朝鮮駐屯兵一万余の兵力を配置して「大討伐」戦が開始され、翌年二月まで執拗な攻撃が加えられたが、いずれも惨敗に終わった。この連続的な勝利は「満洲」、朝鮮の各地に伝わり、「祖国光復会」にかかる人民の期待は大きく、「祖国光復会」の組織拡大に有利な基盤をつくり出した。長白一帯は「祖国光復会」結成から数カ月の間に組織網がつくられ、東「満」・北「満」南「満」の各地に派遣された工作員の積極的活動によって、十大綱領の意味を朝鮮人民に徹底的に浸透させ、広範な地域に「祖国光復会」を組織し拡大させた。

他方、朝鮮内では、朴達・朴金喆らが活動していたが、「祖国光復会」の組織を拡大させ反日統一戦線と革命党の創建を準備するため、一九三七年一月に「甲山工作委員会」を「朝鮮民族解放同盟」に改編し、「反日会」「反日婦女会」「反日少年会」などを通じ、労働者・農民のあいだに深く浸透させるとともに、民族主義者の指導する抗日武装部隊「朝鮮革命軍」や咸境南道の「天道教々徒」なども統一戦線に加え、「朝鮮民族解放同盟」に編入させた。

「祖国光復会」に呼応してたちあがった青年達は、きびしい国境警備網をくぐりぬけて、多いときは日に数十人も群をなして人民革命軍に入隊し、労働者や農民は数十里の積雪山道を食糧・被服をかついで密営地をたずねたことなどにみられるように、朝鮮人民の反日愛国闘争心は大きくもえあがった。愛国人民の組織——朝鮮民族解放同盟——と関係をもつ人民革命軍は、日本帝国主義の全面的中国侵略開始直前の一九三七年五月初旬にはじめて朝鮮内に進攻し、普天堡を占領して日帝の統治機関(警察駐在所・面事務所・金融組合)を破壊焼却するなど勝利をおさめ、男女老少をとわず喜びにつつまれた住民たちは「朝鮮独立万才」「金日成將軍万才」の叫びをあげて遊撃隊員を抱きしめた。朝鮮人民革命軍は「朝鮮人民に檄す！」というつぎのような檄文を発表した。

布告 奸悪このうえない強盗日本帝国主義は、朝鮮を占領して今日に至る二四年間総督政治という植民地政治をもってわれわれの同胞をジュウリンして虐殺してきた。従ってわれわれ朝鮮同胞は血とあせをもってつくり上げた財産を彼らのために残らず略奪されて悲惨な植

民地奴隷の生活を強要されて来た。そればかりではない。彼らはわが民族を第二次世界大戦の弾丸よけ部隊として中国侵略のための戦争道具としてかり出している。わが朝鮮民族はいま生死存亡の危機に立っている。われわれはわが民族の進む方向を切り開いて人民の生活を打開し、日本帝国主義を打倒して祖国を解放するためにたたかう朝鮮人民革命軍である。われわれが六、七年の間「満洲」の広野において日本帝国主義の侵略者どもとの決死的な戦いで致命的な打撃を与えたことは、天下が皆承知しているとおりでである。本軍は朝鮮にいる愛国の志士と熱烈な本軍の愛国闘士との一枚岩の団結のうえに、朝鮮民族の血を吸いとして腹をこやしている吸血魔—朝鮮総督府と直接たたかうことを目的として豆満江と鴨緑江を渡り咸境南北道の一帯へ遠征することになった。しいたげられている朝鮮の同胞よ！ 速やかに出動して反日民族統一戦線に団結し、各種の闘争をもって本軍の遊撃戦争に呼応せよ！ 一日も早く日本帝国主義の統治を粉碎して、真の朝鮮人民の政府をうち立てるために邁進しようではないか！ 一九三七年六月一日、朝鮮人民革命軍司令金日成（「朝鮮近代革命運動史」日本語版三八六ページ）

朝鮮内で惨敗した日本帝国主義は、多数の兵を動員して追撃戦に出たが、六月三〇日の間三峯における戦闘でまたも一五〇〇余名にのぼる多数の殺傷者と捕虜をだす惨敗を喫した。普天保戦闘の勝利は全朝鮮人を鼓舞させ、民族解放への希望をいだかせた。労働者は武力闘争に呼応して日本帝国主義の軍需産業や強制労働を拒否し、サボタージュやストライキを起こした。一九三八年秋、端川—豊山間鉄道敷設工事に強制動員された二〇〇〇余名の労働者が集団逃亡するなど熾烈な闘争を展開し、農民も収奪横領・強制徴用反対、小作争議など頑強に反日闘争を展開した。

日本帝国主義は中国にたいする全面的侵略戦争を開始し、「兵站基地」としての朝鮮から人的・物的収奪横領を強化（一九三八年「総動員法」施行）した。他面において一九三八年七月「国民精神総動員連盟」、翌月には「朝鮮防共協会」を結成し、翌年末までに三五〇〇余支部を組織させ、また反共と侵略遂行宣伝のため一九三七年九月から四〇年一月まで警察の強制動員による「時局座談会」の名目で三〇万九〇〇〇回の集合に、一六〇六万余人を動員させた（「植民史」細川嘉六著、三七七ページ）。また長白革命根拠地一帯には、刑事を多数潜入させて大検挙を実施し、朝鮮民族解放同盟の指導者、朴達・李悌淳・朴金喆らをはじめ二〇〇〇余名の検挙者をふくめ、一九三八年一カ年間に四万四〇〇〇余名の共産主義者および愛国人民が検挙投獄された。朝鮮民族解放同盟と祖国光復会の組織も破壊され、民族解放闘争にも少なからぬ打撃となった。こうした悪条件のもとにおいても武力闘争は各地で展開され、一九三八年の春富爾河戦闘では、三〇〇余名の戦力をもって日本軍三〇〇余名と「満洲軍」五〇〇名と交戦し、日本軍全部と「満洲軍」二〇〇余名を殺傷捕虜にし、軽機関銃六挺・歩兵銃四五〇余挺その他の軍需品を多数鹵獲する戦果をあげた。日本軍は一九三八年末の冬期「討伐作戦」には十余万の兵力を集中し、執拗な包囲攻撃を加え、翌春解氷期までの数カ月間に数百回の大小戦闘を交わす大作戦であったが、戦果はなかった。包囲されながらも勇敢に連戦連勝した朝鮮人民革命軍は朝鮮人民を鼓舞した。破壊された祖国光復会を再建拡大するため、一九三九年五月中旬には嚴重な警戒線を突破して鴨緑江を渡って茂山地区に進攻し、国境警備隊および警察隊と大紅端の野で大激戦をくりひろげ、「無敵皇軍」を敗北させる大打撃を与えた。そして各地の朝鮮人民に祖国光復会綱領をひろめ、人民革命軍を紹介して人民を激励し、普天保勝利以後苛酷な弾圧によって一時下火になっていた大衆運動に新たな希望をあたえ、故国の土をふんだ人民革命軍は樹木の皮をむいて「日本のファシスト・軍閥を打倒せよ！」「朝鮮民族の自由と独立、解放のために不屈の戦いを続けている東北抗日連軍に参加して戦おう！」「抗日大戦の勝利万才！」などのスローガンをきざみこんだ。

日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働運動

発行 1965年10月30日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 労働旬報社

2000年2月22日公開開始

